

創立 100周年記念演奏会

翠嵐は100年の歳月に亘って、さまざまな出来事をくぐり抜け、さまざまな顔を見せてきました。母校翠嵐は時空を超え、まさに“私たちの心のよりどころ”として、今も1人ひとりの心の奥に輝きつづけています。これからも新たなページを加えながら、よりいっそう輝きを増して行ってほしい。今日は、そんな思いを音楽にこめてお届けいたします。目を閉じれば、あのときの、ただ懐かしいでは語り切れない、ほろ苦く、甘く、悲しく、しかもどこか誇らかな青春の姿が、よみがえってくるでしょう。そして、いつまでも色あせることのない情景となって、心に焼き付くことでしょう。

この演奏会のために、斯界で活躍中の卒業生が集まって「翠嵐センテニアルオーケストラ」を編成しました。貴重な“一日限り”のオーケストラが、記念組曲を演奏いたします。卒業生が中心の「100周年記念合唱団」は、在校生と心をつなげて100周年記念歌を歌います。記念組曲「蒼穹翠嵐」、記念歌「もう一度逢える」、在校生が歌う若々しい記念歌「空路（そらじ）」、どれも、この日のために作られた、本邦初公開の作品です。脈々とつながる「翠嵐」の魂がこもる、そして未来へ羽ばたく素晴らしい曲の数々です。

100年だから、翠嵐だからこそ実現できるこの演奏会を、ご堪能いただければ幸いです。

創立100周年記念組曲『蒼穹翠嵐』作曲にあたって

音楽監督・作曲・指揮

手使海 ユトロ(小笠原 寛／高20)

「人の行く 裏に道あり 花の山 いずれを行くも 散らぬ間に行け」

僕とは全く無縁の金融相場界の有名な格言だそうである。35年間商業音楽を作り続けて来た。天の邪鬼でマイノリティ志向で、決して表の道を歩もうとは思ってもみなかった。人の少ない裏道を楽しんで来た。しかし、意に反してすっかり凡人であった。常軌を逸するには勇気が必要であった。脚本家古沢良太氏の本に「貴方には『何か足りない』が、足りない」と言うセリフがあった。完璧という意味ではない。陳腐だという意味である。商業音楽というのは安堵感と裏切りのバランスで成立している。常にその闘ぎ合いなのだ。僕の生き様もそうだったかも知れない。そして今にして思えば、これこそが大平凡主義だったのであろうか？

今回の組曲の委嘱を受けた時、当初、母校の歩み、その時代的背景を脈々と奏でられれば…と考えていた。しかし多感な時期を色濃く過ごした場面とは申せ、そしてそれを誇りにその後の人生を過ごして来たとは申せ、所詮は人それぞれの人生……。波瀾万丈、喜怒哀楽、紆余曲折……色々と体験して来た、ないしはまだまだ歩みを進めている真っ最中であろうと思われる3万にも及ぶ人生を詠い上げる等鳥譚がましく思った。

そこで開き直って、大上段に「人生」を詠ってみようと考えた。人夫々の様々な場面、側面、状況、背景、心情…でも、そこには紛う事無く我々を貫いている「翠嵐」魂。そして、翠嵐で構築して獲得した友という、不変の宝物。それらが根拠となって、過ごして来たそれぞれの人生。それは恰も季節が移ろい行き、そしてまた巡って来て輪廻転生であるが如く。人生そのものを巡る季節に置換し詠い上げる事で、十分母校の節目の周年事業を寿ぎ、モニュメントたり得ると考えた。

坂の上にはいつも青い空が広がって緑の気が立ち込めていた……という想いを込めて『蒼穹翠嵐』。

第1章…恐い物等無く無謀に謳歌した春…「青春想」

第2章…我武者らに燃えて熱く生きて生きて来た日々…「朱夏行」

第3章…来し方をしみじみ回顧し充足感に浸る…「白秋顧」

第4章…円熟した思考の深淵に辿りつく…「玄冬考」

夫々が夫々の想いで夫々の海へ漕ぎ出して行った。そして夫々の海路を精一杯辿って、でも心は、浪飛沫なみしぶきの始まった港はココ。2010年、「第5回青春かながわ校歌祭」の折に作曲した「夢海路」を第5章…結びとした。

この節目に生があって、立ち合う事が出来て、生きて来た証しを残す事が出来て、此の上ない榮譽に深謝しきりである。